国際シンポジウム「アジアにおける平和博物館の交流と協力」

討論概要

1．日本の報告についての討論

司会者：これから約30分間、皆さんからの質問を受けたいと思います。今日は前の方に日本学術会議の平和問題研究連絡委員会の委員の方が主として座っておられまして、後ろの方に学生諸君が座っておりますけれども、その発言の上で資格の上で何の区別もありませんのでどうぞ自由に挙手をしていただければと思います。なんでも結構ですけれどいかがでしょうか。どうぞ。ご発言される方はまずご自分の名前を名乗ってから質問を明確にして下さい。どうぞ。

牧：立命館大学国際関係学部４回生の牧と申します。本日は国際平和ミュージアム、間違えた、すいません、日本平和博物館に関する講演を興味深く聴きました。というのも私自身立命館大学に入学した理由の１つは国際平和ミュージアムに結構、感動してしまって、とりわけ日本の平和博物館が戦争というと、15年戦争しか扱っていないところを国際平和ミュージアムは日清・日露、第１次世界大戦からはじまって、アジア・太平洋戦争まで扱うという、戦争は過去のものではなくて、今もまだ終わっていない、構造的暴力は今もあるし、という、そのような戦争をただ15年戦争だけでないと捉えている点、そして被害の面、加害の面両方とも捉えている点、さらに最後にただ、箱もの - ミュージアムの場合だけではなく、平和友の会などと活動している点、の３点に私は深く感銘したわけです。けれども、私自身も平和博物館のいろいろな所を回ってきましたが、この間の12月に長崎にいったのですが、残念ながら日本の平和博物館というと、本当に15年戦争のことしか扱っていない、という中で、今山辺さんも現在起こっている戦争のことについて研究する重要性について考えられておっしゃられましたけども、もっと多くの日本の平和博物館が日本のアジア・太平洋戦争以外の戦争を扱う必要があるとお考えでしょうか。もし、そうお考えになれば、どのように展示を増やしていくべきなのか、どのようにアジア・太平洋戦争以外の戦争を展示していく必要があるのか、ということに関してお考えをお聞かせ願えればと思います。

司会者：では山辺さんから。

山辺：今日の報告テーマでいただいたのが、アジア・太平洋戦争をいかに展示していくかということでしたので、それに絞ってお話をしたのです。そういう意味で、それ以外の戦争について展示することについて意義がないと言ったわけではもちろんありませんし、現代の戦争について展示することの重要性は感じておりまして、平和ミュージアムでも実施をしているところです。そのとおりなのですが、今日の話で仕切れなかった所はそういう所です。そういう意味で、やはり、現代の戦争について展示をすることの重要性は特に考えておりまして、基本的に展示の視点はそう変わらないので、やはり、戦争が一般の人たちにどのような影響を与えるかという視点が大事だと思うのです。そういうことも含めてやはり戦争を総合的に見ていく。どうしても戦争というとやはり、戦場、それから武器の問題だけになりがちですから、そういうことではなくて今言ったような視点、一般の人たちにどのような影響を与えるか、という視点を持って見ていくことが現代の戦争についても必要だと考えています。

あと、15年戦争以前の戦争について、これはもちろん必要ですが、やはり日本の場合にはどうしても15年戦争とかアジア・太平洋戦争に重点をおくべきだとは思っています。というのは先の大戦ということでまだまだ、重大な、直接影響をもっている戦争ということがあると思うのです。それは、戦争責任の問題等を含めてやはり今もなお残っています。日本人が身近に戦争を考えるには、どうしてもその戦争になるだろうというふうに考えておりまして、そういう２つの面から日本の戦争については、やはりアジア・太平洋戦争や15年戦争に重点をおくべきだと考えております。

司会者：牧君、追加はありますか？

牧：ありがとうございました。可能でありましたら、国際平和ミュージアム以外でアジア・太平洋戦争以外にも展示を頑張っている所がありましたら教えていただければ幸いです。アジア・太平洋戦争以外の戦争も展示しようと努めている博物館が日本にありましたら教えていただきたいと思います。

山辺：もちろん大阪国際平和センターのC室が現代の戦争を扱っています。それからもう少し広い意味での平和の概念にかかる構造的暴力の展示という点では、神奈川県が比較的よくやっていますし、川崎市がそうだろうし、佐伯市もそうです。ちょっと、今は思いつく限り喋ったのですが、他にもあると思います。日露戦争の展示になると歴史博物館などが随分よくやられている所がありまして、例えば栗東がよくやっていると思います。

牧：大変ありがとうございました。

司会者：はい、立命館大学国際平和ミュージアムは現在リニューアル中、改修を進めつつありまして、今日午後１時15分から岡田副館長がそのリニューアルの内容を紹介することにいたしますけども、そこでも実は立命館の平和ミュージアムは今後扱う戦争の領域をさらに広げて日清・日露戦争からイラク戦争まで描くという予定にしておりますので、牧君の期待にもいくらかさらに答えられると思います。

では、君島さん、手を挙げていらっしゃいましたね。

君島：立命館大学国際関係学部の君島と申します。今日は山辺さんの注意深い報告どうもありがとうございました。２つ質問があるのですが、１つは山辺さんのレジュメの１の最後の所で、レジュメには書いていませんが、山辺さんがおっしゃったのは、今、この人権、平和を維持するための戦争・武力行使がおこなわれている。それに対して、ミュージアムの展示は重要だということをおっしゃられたわけです。そこの所です。これは牧君の質問ともかかわるかと思いますが、つまり、私なりに言葉を変えると、いま、人道的介入という名のもとの、つまり、人権を保護する為の戦争—たとえばNATOのユーゴ空爆のようなものです。ああいう、戦争、武力行使の中で、あるいは解放のための戦争というものがなされる現状がある。それにたいしてミュージアムの展示は抑止力になりうる、というようなのが趣旨なのでしょうか。というのが１つ目の質問です。私は非常に大事な側面だと思います。

それからもう１つは山辺さんのレジュメの３の所で、平和博物館への攻撃、という所です。平和博物館に対して、保守派からの攻撃があるという点、これも私はすごく大事な点だろうと思うのです。結局これはその、歴史とか記憶をどういうふうに共有していくか、public memoryという問題で、過去の歴史認識を私たちはどのようにもつのかということに対する激しい政治的闘争が進行している、ということだと思います。そのことの問題についてもう少し立ち入ったご意見をお伺いしたいということです。

そして、これは山辺さんに対する質問であると同時に土山先生に対する質問なのですが、長崎の地で、かつ土山先生はアメリカのスミソニアン宇宙航空博物館が原爆展を開催しようとした時に激しい政治的闘争が撒き起こりました。1995年、今から10年前です。あの時の経験も多分土山先生はお持ちですので、アメリカにおいてもやはりどういうふうにして歴史を記録していくかを巡る激しい思想闘争が進行するわけですが、その問題に触れてコメントなどをいただければ、と思います。

司会者：はい、それではまず山辺さんから対応します。

山辺：最初の問題ですが、戦争によっていろいろな問題を解決していくことによって起きる問題はきちんと日本の戦争を含めて見ていくことが大事ではないかという点で言ったのです。それで、身近な戦争を通して、戦争を見る視点を確立していくことは、これからの戦争を考える上でも大事な基点になるという意味で言ったのです。今の日本の事態を見ていった場合は、すでに自衛隊が派遣されて、多国籍軍に入るという状態のなかで、改めて戦争に入っていくことがどういうことになるかを見ていく上でも、加害はもちろんそうですが、日本の被害も含めて戦争がどのような被害を民衆にもたらしているのだろうかを見ていくことがそれにつながると思います。そういう意味で単に加害がなく、被害ばかりではいけない、という批判はまずいのであって、改めて今の時点になってみると、民衆の被害を見ることの重要性は大きいのではないか、という感じで僕は考えています。

それからもう１つの問題の歴史・記憶の問題ですが、これは今でも激しい政治闘争が起きていると思っています。その際、平和博物館といっても博物館なので、多くは公的な施設なわけですから、それが依拠す

る場がなければ、なかなか展開できないと思っています。そういう意味で、一番強調したのは、村山発言にしても海部発言にしても、こういうことを政府は言っており、このような公的な発言に依拠して、公的な施設で加害を伝えること、平和教育をしていくことが可能であり、必要だということをきちんとやらないと闘えないと思っているのです。そういうことから非常にここを強調したかったのです。もちろん政府の公的態度も実際には靖国問題や、いろいろ問題を持っているわけですが、それを批判するばかりではなく、われわれは政府の公的な発言に依拠する側に立った活動していかないと、公的な施設としては維持できないのではないかと思っておりまして、そういう意味で政府は公的に戦争の反省をしていることを強調したのです。あくまで右翼は政府とは違う立場なのだということを明確にしておいて、そういう意味では国民の中では少数派であり、多数派はわれわれなのだというふうに思っているわけです。

司会者：それでは土山先生がお答えします。

土山：ご指名ですのでお答えいたします。私は例のスミソニアン論争が起こった直後にアメリカの大学に招かれまして、フォーラムに参加しました。その体験も踏まえてちょっと申し上げたいと思うのです。後でおそらく朱先生のほうから南京大虐殺の問題について詳しくお話があると思うのですけども、日本人の学者の中には、南京大虐殺の数をできるだけ少なくしようと、あるいは中には全くなかったという討論まで出てくるわけですが、その場合は非常に被害者の数を低く見積もりたいという欲求が働いております。それに対してスミソニアン論争の時は、むしろ逆でして、もし原爆を落としていなかったら、アメリカ人の兵士50万・100万の命が失われただろうという例のトルーマン大統領の論旨を退役軍人などは信じて疑わない。一見、両者は数の上ではまるで正反対のことを言っているようですが、深層心理からいくと全く共通していると思うのです。つまり、いずれも自分の国家、自分の民族が過去に犯した非常なやましさ、あるいは罪深さ、というものからできるだけ目を背けたいという心理が働いていると思うのです。ですからそれにたいしてどう向き合うかというのは今後非常に大事な宿題だと思います。けれども、１つだけいえることはアメリカのスミソニアン論争の時に非常に強硬な退役軍人団体と良心的に事実を伝えようとするアメリカの歴史学者が一堂に会して論争をおこなった。この事実は、たとえそれが不毛の対立であったかもしれませんが、後に続く大きな解決のヒントを与えたのではないかと私はそのように思っております。回答になったかは分かりませんが。

司会者：はい、君島先生はよろしいでしょうか？　もう10分ほど時間がありますので、どうぞ手を挙げてください。どうぞ、２人いますので後ろの方から行きましょう。

安田：立命館大学４回生国際関係学部の安田と申します。今日は興味深い話、どうもありがとうございました。前者のような国際的な、高度な質問ではなくて、単純な質問で恐縮なのですが、レジュメ３の所で平和博物館への攻撃の影響についてですけども、博物館が右派勢力の攻撃を受けて少しづつその攻撃に屈してしまって従軍慰安婦の記述などの展示を削除、取りやめてしまったというお話があったのですが、具体的に保守勢力からの攻撃がどのような攻撃であったのかというとことを知りたくて、そして日本には警察という社会正義を守る国家の権力が存在するわけですけれど、そうした警察は右翼の攻撃に対してどういった対応を取っているのかということをお聞きしたかったのです。

司会者：はい、ありがとうございます。では山辺さんから。

山辺：攻撃の仕方はいろいろあります。市民運動みたいな形をとって、例えば街頭宣伝車のようなものをもって押しかける、県に押しかけたり、それからピースおおさか、つまり、大阪国際平和センターに押しかけたりすることもあります。それから公立ないし、公が出資した第３セクターですので、議会でそういう質問をする形です。質問しないまでも議員の力を使って圧力を掛けて、県なり府なりの態度を変えさせる、というような攻撃の仕方があります。もちろんマスコミで『産経新聞』等でやるということもあります。裁判に発展することもあります。そういったさまざまな形をとって強引にしています。非合法手段を使っているわけではないので警察の取締りということはないと思いますが、やはり街頭宣伝車に関してはきちと規制できないものかと思うことはありますが、そういうことです。

安田：ありがとうございました。

司会者：はい、ありがとうございました。私の体験も少し付け加えて起きますと、私は長崎の原爆資料館の総合監修作業を加藤周一さんといっしょにしたのですけれど、あの原爆資料館の監修をするにあたって、市長から依頼されたことは長崎に原爆が落ちた後何が起こったかだけではなくって、なぜ長崎に原爆が投下されたのかをその前史も描いて欲しいということだったので、いわゆる15年戦争を簡単に描くコーナーをつくったのです。その中に南京事件に関する写真が１枚展示された。そのことが日の丸会と呼ばれるいわゆる右翼的なということでしょうが、市民団体の目にとまって、結局そのような博物館を指導した加藤周一や安斎育郎に支払った謝礼は返還させるべきである、という謝礼返還要求、住民監査請求、そして裁判と続いたわけです。私も長崎地方裁判所の第１審でそれに関して１時間ほど証言をしました。その結果として長崎市側が完全に裁判でも勝ったので何の問題もないように思われますけども、いまはもういわゆる右翼と呼ばれている人びとからこの写真はけしからんというふうに言ってくることはなくなったということですけれど、しかし長崎県の博物館の関係者に聞いてみると、やはり加害展示はすることに気後れがするといっております。進んで加害に関する特別展をする気にはならないということですので、ある意味では規制力として働いているということです。そういう点も注意しなければいけないだろうと思いました。

では、次の質問も安田さんです。どうぞ。

安田：私は東京の第五福竜丸展示館の学芸員をしています安田と申します。第五福竜丸展示館は財団法人第五福竜丸平和協会という財団が東京都から受託しまして管理運営しております。そこの事務局長をしております。山辺さんの講演、大変興味深くお聞きしました。私どもの第五福竜丸展示館はご承知のようにビキニ水爆実験の被曝をした遠洋マグロ漁船の展示館ですので、直接的にアジア・太平洋戦争を扱うわけではありませんが、第五福竜丸が造られた戦後の日本の社会、敗戦直後の日本社会やまた、戦争を通じてたくさんの漁船が徴用されて犠牲になった問題、そういったことをあわせて展示することで第五福竜丸が建造された時代背景、といいますか、そういったものの原理を広く若い人たちに伝えていきたいということでずっと試みておりました。まだ不十分ではございますが、今後もっと技術化していきたいと思います。

さて、質問なのですが、山辺さんのご講演で、レジュメ１の部分、特に日本政府は公式にアジア・太平洋戦争の問題について、あるいは侵略戦争の問題について特に80年代から90年代、村山首相の見解が非常に代表的な意見だったと思いますが、このことに触れて、そういった行政府の公式態度、確かにこれをわれわれ自身、博物館をやっていくものが活用をし、それをより大きく捉えてさまざまな博物館に対する攻撃の問題でありますけども、活用していかなければならないというのは非常によく分かりますし、私もそうでなければならないと思うのですが、現実にその問題が起こっている中では日本政府がどのような公式見解を述べていようと、そのことを知ってか知らずか、あるいは意図的に無視してか、さまざまな攻撃が掛けられている可能性・危険性が非常にあるのではないかというふうに思えました。東京都の場合、直接的に博物館に日の丸・君が代の統制はありませんけども、それに類するような形で展示内容への干渉が今後出てくる危険性があるのではないか。その場合に、日本政府の公式なさまざまな見解を活用していく、ということは必要なことですが、それをよりそれらの攻撃を跳ね返していくためにどのようなことが必要なのか。例えば第五福竜丸展示館で言いますと、第五福竜丸を保存させて、あの展示館を立てさせたのは日本全国の市民の運動、あと、世論が有りましたから、そういったことをいま再び第五福竜丸展示館でもより重視していかなければならないのではないかなということを私は考えているわけです。それから、たくさんの研究者の方がたのより多くのご協力や対話といいますか、そういったことも非常に重要なのではないかなというふうに思いますけども、この問題は非常にこれから直面していく可能性のある問題だと思いますけど、そこの所を、もう少し突っ込んで質問させていただければと思います。

司会者：はい、山辺さんどうぞ。

山辺：具体的には喋りにくいのですが、基本的に先ほど喋ったことの繰り返しになってしまうと思うのですが、１つやはり博物館としてきちんとした研究・調査をした、展示なり、報告書なり、研究成果を出していくことが基本的だと思うのです。そういう意味で、例えば単に侵略という言葉を使うのではなく、その地域でどのような加害の実態があったかという事実をきちんと押さえた上で展示することが重要です。それを支えていく研究者の役割は大きいですし、学会の役割も

大きいと思うのです。それからもちろん市民運動が博物館に対して例えば加害が弱いんじゃないかと批判することを含めて、市民運動が博物館を支えることは必要だと思います。市民運動ががそういう攻撃に対抗して、右翼の侵入に対抗していくことが大事だと思います。結局それが無いと攻撃を跳ね返せません。跳ね返すことができるというのは沖縄などはそうですが、やはり全然違う強力な市民運動があると思うのです。そういう住民の力がないとできないと思います。そういう意味で管理、ないし、研究の力量をつけるとともに、そういう市民の力が押し返していかないと苦しいのではないでしょうか。そういう意味で東京都は非常に大変で、あんなにひどいことをしている石原知事が圧倒的に都民の支持を得ているわけですから、闘いは大変だろうと思うのです。そういう状況を変えていく努力は地道にやられていますし、そういうことは大事なことだと思います。そういう努力の積み重ねしかないのではないかと思います。

司会者：はい、ありがとうございました。

立命館アジア太平洋大学〈APU〉の方：こちら側からの質問、よろしいでしょうか？

司会者：はい、どうぞ。では、APUに最初質問していただきたいと思います。こちら、拍手が起こりました。

パク：おはようございます。私は、立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部３回生のパク・キョンシンといいます。在日コリアンです。私たちは学生有志で立ち上げたNPOをみんなで運営していて、その代表を勤めさせていただいております。私たちのやっている活動というのは主に教育なのですけれど、今日の講演を聴きながら思ったことは、日本において、ものすごく戦争・平和関係の博物館が多いということを実感しました。ただ、私がいつも活動しながら思うことは戦争に関する認識だとかあるいは、罪の意識がすこしづつ80年代から生まれてきたことをおっしゃられていたのですが、それがどのように実際に市民や地域の学生に認識されているかという点を追求するとやはりまだ事態の機能というか役割というのが少ないように思うのです。これから、そういった意味でそういうものを伝えていく博物館のあり方とかあるいはなにを展示するかよりもどのようにそれを伝えるか、という部分を何か見解があれば聞かせていただきたいと思います。

司会者：はい、それでは山辺さん、どうぞ。

山辺：それも難しいので、博物館の力というのは限られたものがあると思うのですが、その強みを生かした形で戦争の事実を伝えていく、それによって日本の戦争を考えてもらうということに案外つきるのではないかと思うのです。そういう意味で教育の場合、学校教育の力は大きいんと思うのですけれども、それと連携する形で学校でできない実物資料を通して戦争を考えていくことなどでの協力ができると思います。それを含めた、博物館の基本的な役割を地道に果たしていくことでしか、それには対応できないのではないか。そういう意味で多面的な、さまざまな例を紹介していきました。その形でやっていくことでしかないのではないかと思っています。

司会者：充分お答えできたかは分かりませんが、一応、そういう答えで。
それでは斎藤先生から。

斎藤：学術会議の斎藤です。昨日と今朝、ミュージアムの展示を２度ほど見ました。東京に戻って何か報告をしろといえば、私は必ず１つは言いたいと思います。それはベトナム戦争を止めた力という所で何が書いてあったかというと、より多くの人が真実を知ったからベトナム戦争は止まるようになった、とありました。ここにすべての議論の集約があると思います。その報告をしたいと思います。

このことは、もうちょっと言わせていただきますと、環境問題をやっていてごみ処分場の反対なんかをやると、やはり右翼の街宣車が来るのです。そういうこともある。しかし、本当に何が問題になっているかということをみんなが知っていった結果から全国数百箇所のごみ反対運動が力強くなっていったのです。そういう、みんなが、１人でも多くが真実を知っていけば、それがパワーになって、そしてそれで、組織的な機能も高まると思うのです。

司会者：はい、東京農工大学の斎藤先生から貴重なご提言をいただきました。知るということの大切さ、その面での平和博物館の役割が指摘されたと思います。それでは最後にグェン・カ・ランさん。ベトナムのホーチミン市の戦争証跡博物館の館長です。

グェン：太平洋戦争の問題は微妙な問題だと思うのですが、右翼からの攻撃があった場合にどういう対応をされているのでしょうか。

ベトナムの戦争証跡博物館ではベトナム戦争の展示を中心にやってきたのですけれども、もっと幅を広めて1885年、フランスの侵略、そういうものから今日までに展示を広げていきたいと思うのですが、特に1940～45年、日本の侵略に関しての資料を集めて展示をしていきたいと思っているのですが、非常にその資料が集まりにくい、まれだ、ということで、どこに連絡をとればよろしいでしょうか。

山辺：右翼にどのように対応したかは言いにくいのですが、例えば、この写真の説明が不適切である、あるいはこの写真をここで使うのは正しくないとされた場合は、その写真を使うのをやめたり、説明を変えたりして対応しました。そういう形で個々の具体的に攻撃された間違いについては対応しますが、その際には基本的には展示の理念を変えない形でより展示を事実に基づいた充実したものにしていったのではないかと思っています。既設の、館がもともとあった所ではそういう対応になっているのではないかと思っています。ただしそれによって、積極的な展開に対して消極的になるとか、押さえる形になるとか、そういう自粛的なことも当然起きていますが、基本的にはそういう対応であったと思っています。

日本のアジア・太平洋戦争の時期におけるベトナムの資料、ということなのですが、これなかなかむづかしくて、うちがそこの所の展示をしているのですが、これはベトナムの方から早乙女さんを通じて提供された写真資料を展示しているのです。日本で独自に展示にふさわしい資料を私の方もまだ充分に見つけられていないので、それが今の課題だと思います。

司会者：はい、残念ながら時間が過ぎておりますので、これで山辺さんの報告の討論を終わります。
次の報告に移りたいと思います。

２．中国の報告についての討論

司会者：さて、それでは質問を受けたいと思いますのでどうぞ手を挙げてください。約30分ありますから。土山先生。

土山：大変貴重なお話ありがとうございました。今述べられた中で、日本政府の要人が首相の発言とは別にしばしば過去の歴史を否定する言動をおこなっています。これにはその背後に右翼系学者、あるいは右翼系ジャーナリストの存在があると思われます。右翼系学者といっても所詮は学者ですので、自分の説が国際的な批判に耐えるかどうかということを充分にチェックすることが必要だと思われます。そこで、これは提案ですが、例えば先生の記念館などが主催して、そういう右翼系学者と中国の学者あるいは第３国の学者がclosedでこの問題を徹底的に論議するという試みがもてないでしょうか。というのも、例えばドイツとポーランドが最初は非常に激しい議論をしながらやがて相互理解に到達して、共通の歴史教科書をつくるに至ったということを聞いています。アジアでもこうしたことが絶対にできないとは私は思わないのですが、その点、先生のお考えをお聞かせください。以上です。

司会者：ありがとうございました。今の質問は、日本でしばしば物騒な発言をしている右翼系の学者といわれる人びとと中国の学者が一堂に会して率直に意見をぶつけ合う所からこの問題を解決する糸口を見つけることができないか、実はこのセッションが始まる前に朱成山館長とお話したのですが、来年、2005年というのは大変大事な年なので何か重要な国際シンポジウムを開きたいというご意向も言われたのですが。

朱：近年来、日本の右翼や政府の諸要人がさまざまな方法を利用して南京大虐殺事件の歴史を否定するという行動が見られます。非常におかしな話が出てきたこともあります。だんだん悪い道に入る状況になったわけです。この問題について私たちは非常に心配しています。私もドイツ、ポーランドには何回も訪れましたから、そちらの学者と検討して交流したこともあります。ドイツとポーランドとアウシュビッツの館長とこの問題について皆それぞれ検討と交流をしました。その結論は、私は歴史の認知に対する態度だと思います。ドイツ人は誠実な謝罪をし、心から申し訳ないと言いました。わずかな一部はそのような誠実な謝罪をしていませんが、大部分には心からの謝罪と反省があります。ドイツの大統領はポーランドに行ってひざまずいて被害者の人びとに謝罪しました。それに対して、日本の小泉首相は次つぎに靖国神社に参拝しています。去年ドイツの大統領はわざわざ南京の記念館を訪問し、館長と南京の生き残った被害者の人と話し合い、その歴史を絶対に忘れないということを話しました。私はそれを聞いて非常に感動しました。日本の小泉首

相は靖国神社に参拝して、日中の両国間は２年間、冬の時間になっています。私が先に話したように歴史を記憶して、歴史の問題は歴史の目を通して見ないといけないと思います。日本人の態度は誠実な謝罪を認めるようなものではないといけないと思います。ドイツとポーランド、ドイツとイギリスの両民族間はお互い理解しあえるようになってきていますが、日本と中国の間ではいつそのようなことが達成できるのかと私は思います。歴史認識が大事だと思いますが、私たちは中国、韓国は共同で使える東アジアの歴史教科書を編集中です。何回も教材について討論し、先日も東京に会しました。2005年には出版できるかと思います。その目的は歴史の認識を達成するためです。以上です、ありがとうございました。

司会者：土山先生、コメントがありますか？

土山：質問の趣旨がよく伝わっていないようなのでもう１度繰り返させていただきます。過去の歴史をよく理解している学者同士が話し合うのではなく、むしろそれを否定するような学者 - 右翼系の学者、そういう学者と中国の学者、それから第３国 - ドイツやアメリカの学者が一緒に討論することができないのでしょうか。もしそれを日本の学者が断れば、やはり自分の説に自信が持てないということになりますし、もしそこで激しく言い合いになりましても顔の見える論争をすることは解決の第一歩になるのではないか、そういう提言をしたのですが、いかがでしょうか。

司会者：もう一度仕切りなおしということにいたします。質問された土山先生は長崎大学の元学長でいらっしゃいます。

朱：右翼の意識は決まったものですから、発展的な討論はよいのですが、根本的には解決できないと思います。彼等は事実を避けたいと思っているので意識的に根本的事実を否定しようとしているのです。例えば、田中という学者が大虐殺事件をめぐって主に争点にしたことは、彼の考えでは、当時南京には20万人しか人口がなかったのにどうして30万も殺されたのか、そして、５キロ平方メートルしかない南京でなぜ30万人も殺されたのか。彼のそういう説は他の学説も引用してどんどん大きくなる傾向にあります。1937年、当時の南京の人口は120万人います。そして日本軍が侵攻した時は、市内に残った人は60万人いました。そして、安全区の中には20万人だけでした。その人口を南京の全人口だと思ったのです。安全区の面積は3.86平方キロメートルでした。それだけで、南京の城壁以外はまだ面積があります。これは常識の問題なのに、右翼はそういうことを大げさに取り上げます。このような状況では討論はできないと思います。日本の、本当に歴史を認識している学者は私共と交流できますが、こういった非常識な人びとと私たちは交流したいと思いません。

司会者：ありがとうございました。ですから、今のところ対話的な機会を設けるというよりも個別攻撃対抗型の対応をせざるを得ないだろうというご認識のようです。それでは井口先生、お待たせしました。

井口：平和問題研究連絡委員の井口といいます。土山先生のご質問と関連して情報を報告しておきます。中国との間では政府間で公式の約束に基づいて教科書をお互いに点検するという作業はまだ始まっていないと思いますが、韓国との間ではすでに３年前から韓国政府の相当の譲歩というふうに日本の新聞では報告されたと思いますが、それによって協定が結ばれて、政府間の協定に基づいて両国の教科書に関する研究調査の委員会が２つできておりまして、２年間に一定の結論を出すという仕事を始めています。私はすでに２年間経っていると思いますので、まもなく本来なら出ないといけないのだろうと思います。ただ、この協定は大きな弱点を持っています。そこで、どういう報告が出ようと必ずしもそれが教科書作りに反映されると、義務付けるような協定にはなっていません。また、どういう人びとが選ばれて作業されているかについて私自身は２・３知る限りでどういう基準で日本側の方が選ばれたのかについても詳しくは存じ上げません。ただし、この会議は相当密室でおこなわれていて成果が発表されるまで経過はわからないようになっているように聞いています。ですから、そういうことが中国との間で全く不可能だとは思えないのでむしろこれからの努力目標として政府間でやるくらいの動きを日本人はして、またそれに答えてくださるような交渉を両国で進めればいいのではないかというふうに思いますが、少し道のりは遠いかなと、朱先生の話を聞いていて思いました。これは状況の報告ですので土山先生もご存知のことかと思います。

国際歴史学会による日韓歴史会議も固定されたメンバーによる会合はすでに４回目を迎えています。ここ

は両国の歴史教科書問題ではなく、歴史学の方法そのもの、世界の歴史をどのように捉えるかという問題も含めて議論していますので、これは文字通り歴史学そのものに関わる専門家たちの議論です。私はあまり専門家でもないのに入ってはいるのですが、何回か参加したことがあります。これもおそらく今後まだ続いていくと思われます。

ここからは朱先生へのお願いと質問になります。あえて誤解を恐れず、していただくのは困るので、絶対誤解しないでいただきたいのですが、私は南京大虐殺事件の幻派、否定派ではありません。むしろ日本における事件関係者の手記発掘などを少しはお手伝いしているつもりです。この博物館の企画にも最初から参加させていただいております。にもかかわらず、これから申し上げることは私が中国へ行った時に感じたことと、中国の人をこのミュージアムの前身である平和のための戦争展をご案内した時に感じた感想から得たものです。中国の人はこう言いました。「本当は原爆はもっとたくさん落とされてもいいのではないか。もっと早く戦争を終え、中国の人にこれほどの被害を与えないためには、という感情を中国の人は今でも持ちますよ。」というふうにおっしゃいました。で、私もそれは理解できないわけではありません。しかし、一方私が訪ねたのは1984年の夏です。中国の北京の軍事博物館に参りました。大変立派で大きな博物館で私は１週間通いましたが、まだ充分に自分でも見たとは思ってもいませんが、今変わったかもしれません。20年前ですから。もし変わっていれば教えていただきたいのですが、最後の出口です。最後の出口、何で終わっていたかというと朝鮮戦争は文字通り祖国防衛戦争として描かれた上で、最初の中国の原子爆弾実験成功の大きな記事が出て、われわれもついにこういう兵器を持つことができた、成功したというのが一番最後の展示でした。これで中国軍事博物館は何を訴えたいのだろうかということを私は非常に違和感を覚えました。先生のご報告の中でいうと、広島、長崎の原爆資料館では南京事件の内容などはほとんど正確に伝えられていない、これは弱点だと思う、とありました。そのとおりだと思います。しかし、一方で、広島・長崎の原爆資料館は日本人だけの被害を訴えたいのではないのです。核兵器というものを世界からなくさないかぎり人類の本当の平和はもたらされない、どうしてくれるのだ、皆で核兵器を根絶しようという世界へのアピールだということも理解していただいて、あれかこれかの問題ではないと私は思います。これはお願いであり、妙な質問だったかも知れません。先生のご見解をお伺いするのはお気の毒かと思いますが、私の意見はそういうことなので、もし先生のご意見が伺えるならばありがたいと思います。

司会者：はい、ご質問された井口さんは歴史学者で京都府立大学の学長です。

朱：もちろん多くの中国側の市民の中では、広島・長崎の原爆被害は、そもそも日本が中国を始めアジア諸国を侵略して加害したのだから、自分がそういう結果になったのは当然だ、そういう感情があるのは事実です。もちろん、広島・長崎の罪のない一般市民が被害を受けるのは私としては同情心を持っています。彼らは被害者だと思いますが、さっき安斎先生と話したように来年は世界反ファシズム60周年です。一度広島・長崎の原爆資料を南京で展示しようと思ったのですが、その展示の目的は多くの中国市民に対して核兵器は大変危険なもので平和に対してよくないということを市民に知って欲しいという目的です。それは自分の考えですので、中国で実現できるかはまだ分かりませんが。根本的な問題は、中国人と日本人の原爆に対する態度が違う、立場が違うことがあります。中国でどういうような内容・方法で展示するかが重要だと思います。核兵器の問題ですが、これは世界のどこの国も反対しています。

日本とアメリカの安保条約もあります。日本とアメリカの安保条約の中で、核兵器を捨てる勇気が日本はあるのですか。この日本とアメリカの安保条約の上で日本がだんだん強くなってきたことに私たちはすごく心配しています。だから、核兵器とこれに反対することは私は全人類の努力すべきことと思います。東アジアの平和のためにまだ多くの皆さんの努力を必要とします。以上です。

司会者：ありがとうございました。また時間が迫ってきました。中国についても、もう１つだけ最後の質問。

南：愛知教育大学の南と申します。感想を１つと質問を１つさせていただきたいのですが。朱さんのお話を聞いて、日本人だったらはっきり言わないことがしっかり言われているということで大変感心しました。例えば、日本の博物館が加害の歴史展示という一線を長期にわたって突破ができていないこととか、反省する勇気が足りないとか、私たちにとっては耳が痛いとい

うか、所々を突くというか、そういう発言があって、私は改めて、先ほどの山辺さんの講演とも関係するのですけど、日本の平和博物館の一番の問題は、やはり、加害の展示がきちっとされていないことだと改めて感じました。日本の場合は、1975年の沖縄の県立平和祈念資料館ではじめて日本軍の加害の展示を公立の博物館でやった。それまではなかったのです。沖縄以外で90年代初めのピースおおさかで、それに踏み切るまでなかった。ドイツと比較して、私はドイツの現代史について研究しておりますが、やはり、その差ははっきりあって、山辺さんがおっしゃった通り、日本はやっと90年代で、加害の課題を公式に、公立の博物館で展示するに至った。その歩みといいますか、その発展のプロセスは非常に重要なのですけど、しかし、根本的にそれが遅かったということと、そういうことを否定する一方で、戦争を肯定する博物館がたくさんあるというそういう根本的な弱点を持っていて、先ほど、加害問題と被害の問題の両方を提起することが大事だと山辺さんがおっしゃった通り、被害の展示の重要性は確かにあると思いますけれども、基本的な問題はやはり日本のアジアとの戦争、中国との戦争に関して日本の侵略戦争だったことが基本的な事実だった。そのことがはっきり展示された上で被害の問題も展示されるという、基本的な構造を持たなければ本当の意味の平和博物館の展示にならないというふうに私はやはり考えざるを得ないです。そういう意味で、朱さんの指摘は改めてそのことを私たちに思い起こさせてくれるものだと思います。一方で、1つここは質問なのですが、さきほど中国の人びとに対しては歴史を記憶するが恨みは持たないとそういう態度を求めたいということを言われて、私も感心しましたが、日本人に対して、日本人も中国に対して誠実に謝罪する態度をとるべきだとおっしゃいました。それは私は、一般的にはこの言い方を受け入れるわけですが、しかし、この点、もう少し厳密にお伺いしたいのですが、ここにいる世代はほとんどは、戦後世代で、戦後生まれか、または、戦争中まだ子供であった世代で、戦争に直接責任があった世代の人はほとんどいないと思うのです。中国との侵略戦争に対して直接責任のなかった人びと、日本人に対して謝罪を求めるということが、はたして適切なのか、ということなのです。つまり、戦後の日本人の世代は、戦後世代なりの責任のとり方があるはずで、それははたして謝罪することなのかということなのです。それで私は、もちろん戦後生まれですけれども、私は南京の朱さんの記念館を3度訪れたことがありますが、歴史を知るということ、そしてその知った歴史、戦争の加害の歴史を知るということ、そういった歴史にもとづいて、戦後世代として行動する仕方があって、それは謝罪ではなくて、それは例えば、国家に対して謝罪をさせる運動する、あるいは、補償する運動をする、そういう支援をする、そういうことが戦後の世代の課題であるべきで、頭を下げることではないのではないか。その点で朱さんが戦後世代の日本人の、責任というか、課題であるというか、厳密に考えると、日本人一般というわけではなくて、日本の戦後世代の課題は何であるか、それをどういうふうに考えていられるかを質問します。

司会者：はい、ありがとうございました。戦後世代の戦争責任の問題については、これまでもたびたび議論されてきましたことですけれども、館長の見解を承りたいと思います。この答えを、このセクションの最後にしたいと思います。

朱：本当に、まったくおっしゃる通りで、私も同感です。今の日本は政府からの謝罪は難しいことだと思います。この前の村山首相は過去の歴史への謝罪をしました。今まで正式な謝罪はなかったことです。多くの日本人、とくに若い人は、なぜ中国人はいつも謝罪、謝罪というのかといいます。それは、中国人のことではなくて、日本人の市民自身の問題です。謝罪すべきだと思います。もちろん若い人の教育は重要だと思いますが、歴史を知らない若い世代に、事実を伝えることが重要だと思います。でも、この前の鹿児島県教育委員会で、中国に修学旅行した学生さんが、どこへ行っても南京大虐殺記念館へ行ってはいけないという提案を出しました。だから、その修学旅行の学生さんが南京へ行って絶対記念館の中を見学してはいけないということになりました。中国のことわざで、耳をふさいで聞こえないというものがあります。私たち記念館としてはできるだけ多くの中国の若い人、また日本の若い人が歴史の真実をわかるように、努力しています。26人の中学生が中国の学生と一緒に南京大虐殺で生き残った証人を調査して、話をしてその証言を聞いて、共同で来てその活動に参加しました。8月に韓国でおこなわれる歴史認識についてのフォーラムに、日本と中国の若い人が参加して歴史の教育を議論します。若い青少年の教育と交流が重要だと思います。ご質問、ありがとうございました。

司会者：戦後の世代の戦争責任について、質問者との間で意見の違いがあるかもしれないということが今わかりましたけれども、今この段階でさらに言うと時間がかかりますが、何かありますか。

南：歴史の意識を共有するということが大事だということは当然のことですが、つまり、国家に対して謝罪を求めることについては正当だと思います。国家は連続しているのですから。しかし、戦後世代の若い人の謝罪を求めるかどうかについて、その１点をもう少し明確に答えてもらいたいと思います。

朱：私たちは、国として謝罪すべきだということは今までも言ってきました。私たちもやはり、多くの青少年に歴史をできるかぎりわかるように努力していきます。中国人の今までの教育は、日本の侵略戦争は国家の責任で、日本市民には責任はなく、同じ被害者だと教育してきましたが、日本の学者はそういうのは間違っていて、日本の普通の市民も責任があるというように言っています。今までの中国の教育は、人民は人民でというように１つにして教育したのです。だから中国政府はもちん日本政府に謝罪すべきだといつも要求しています。小泉首相はよく靖国神社に参拝していますが、中国政府は抗議をしています。経済の面は非常に頻繁で暖かいですが、政治面は冷たくて冷却状況になっているわけです。中国と日本は政治の面は今でもまだ冬です。自然の冬よりは長い長いものです。いつ春が来たのか全然わからないです。

司会者：はい、ありがとうございました。やはり政府と国民とを区別しているようなのですが、多少明確ではないかもしれないので、今もうやめます。

APUの方で質問があれば手を挙げてみてください。今はやりませんけど。後で総合討論の所で是非APUからの発言を優先的に取り上げたいと思います。

３．ベトナムの報告についての討論

司会者：グェン・カ・ランさん、ご報告ありがとうございました。ここで質疑討論を30分くらいとりたいと思いますので、ご質問のある方は。
では、藤岡先生。

藤岡：立命館大学の経済学部の藤岡です。このミュージアムで、どうすればもっと被害の小さく、あるいは早く戦争を終結できたのか、ということを探求することはされないのでしょうか。たとえば、ロバート・マクナバラのクループが参加をして、こういう時にこういう認識が戦争が間違っていた、一番いいのは、そういうような、たとえばアメリカのマクナバラのグループのような、そこでもう１つの見解というのでしょうか。どうして、ジェネレーションギャップが進展していったのか、そういうことをミュージアムの中に見られるのは１つ面白いことだと思うのです。同じことが、ルイ・アダムスのミュージアムにあるのです。これは、原爆を開発した所ですけど、そこでも市民によっておこなわれている展示のコーナーがありまして、そこでは広島・長崎の市民クループが展示できる。そこでの対話がもてている。こういった所ですから、そういったことは難しいことだと思いますが、他の異なる見解のようなものを、展示できるような考え方、捉え方はないでしょうか。

つまり、対話をする場を設けたらどうですか、ということです。イクジミットもアクノーバルにグループを分けて、どのように思ったかについてや、見た人がそのようなことがあったのかということがわかるように、そのような展示はできないでしょうか。

グェン：藤岡先生のご質問に対してですけれども、1995年にベトナムとアメリカの外交関係は、だいたい正常化するということで関係はよくなったのですけれども、でもやはり、歴史観の問題ですか、きちんとそういう問題は解決されていない。そういうベトナムの側の展示、アメリカ側から見た対立した考えを、ベトナムの博物館に展示できるかという問題は、今すぐ答えることはできないことです。だから、はっきり言っておきたいことは、ベトナムにとってあれは侵略戦争なので、アメリカが防衛のための戦争とか、いってもそれは受け入れることはできない。でも、先生がおっしゃったことは非常に興味深いことなので、またこれから考えてみたいと思います。

司会者：藤岡先生、よろしいでしょうか。それでは次お願いします。

クアルチェック：３月にかなり多くの博物館に行かれたということなのですけれども、どのように若者を博物館に引き付けていくかといことは、これはベトナムだけではなく、よそでも重要な問題だと思います。立命館大学の国際平和ミュージアムではたくさんの若者が活躍しています。戦争の問題だけでなくて、環境の

問題、その他で活発にやっていますけれども、たとえばこれは提案ですけれども、ベトナムの若者を、他の問題について考えさせてみたらどうでいしょうか、例えば、イスラエルとパレスチナの問題、朝鮮の問題、そういう平和博物館こそが、そういうことをするのに適切な場ではないでしょか。それから、実際に中国とかカンボジアとかラオスやタイから、青年を招いて若者同士の交流をしたらどうでしょうか。あえて質問をさせていただくとすれば、そういう交流の部屋というものはあるのでしょうか。

山根：今のご質問をいただいたのは、近畿大学のロバート・クアルチェック教授です。グループ28の代表をされています。そして、ピース・マスト・プロジェクトをしています。すいません、ご紹介が遅くなりました。

グェン：さきほど提案されたということに、私もまったくそのとおりだと思います。世界のさまざまな紛争の問題ですけれども、これはこれから展示をしていきたいと思います。現在あるのはベトナムの戦争、それから世界の反戦運動の展示はしていますけれども、世界各地の紛争についての展示はこれからしていきたいと思います。来年は建て直しをしますので、すっかりよい平和博物館ができましたら、その博物館を訪問したいと思います。

司会者：まだ、時間がございますので、奥本さんお願いします。

奥本：奥本京子と申します。大阪女子学院大学の所属です。そして、学術会議にお世話になっています。とても面白いご報告ありがとうございました。それで私は、１つ不思議なことというか、質問があるのです。６番目の所の、今質問が出ましたが、そこと関わりがあるのですが、若い人たちをどのように利用をするのかというお話です。「加えて」という所で、翻訳がちょっとわからない所もあるのですが、軍隊・大学・工場・企業などの多くの青年団が、士気を鼓舞するような形で、場所を提供すると言い換えていいのでしょうか。もしそうでありましたら、私の平和博物館に対するイメージというのは、理解というのは、軍隊主義、民に対する抑圧を克服するためのもの、そして、平和を創造していく場所、創り上げていく場所が平和博物館だと思っているわけです。軍隊の若者たちが自分たちのクループのメンバーシップをちょっとよくわかりませんが、広げていく、その式典上、どういうふうにつくられていくのか、もう少し何か説明をいただけたらと思いました。また、もちろんいろいろな人たち出入りされ、来館されるし、そういう人たちが平和博物館に足を運ぶことが１つのきっかけになって、平和について考え始めてもらえるということであれば、大変大歓迎すべきことだと思ったのですが、その点がわかりにくかったので、お願いします。

司会者：ちょっといいですか、今のやり取りですけれども、奥本さんにとってはちょっとなんとなく平和博物館に兵士がいくということに抵抗を感じられるということですが。ベトナムの方は、要するに、兵士の団体の入隊式、というか入団式、兵士だけではなくて、他の若者もグループというか団体の入団式みたいなのも、今その博物館に行くとあると言ってましたけど、厳かな雰囲気があるから、そこでやってもらうとか、兵士だけでなく、他のどんな人も、歓迎する意味で、兵士を含めて歓迎すると言っているのです。伝わっているかどうか。

いまおっしゃったのは、ベトナム戦争の勝利がやはり輝かしいということです。だから、そこに行く。非常に神聖な場であると、たぶんベトナムの方が認識されていることと、私たちが普通に日本人が持つ認識とちょっとずれがある、ということです。

グェン：ベトナムには軍事博物館もあって、ベトナム戦争の勝利に重点をおいた所もあるのです。このベトナム戦争証跡博物館の方では、その戦争の残酷さを示すもの、人びとの苦しさをあらわす証言、あるいはそういう展示物を見せて、どうして青年が今兵士をしているのかを考えさせる所です。

司会者：この辺でAPUにたずねてみたいのですけど、APUの方でご質問ありますか。ありませんか。総合討論のほうでよろしいですか。

APUの方：特にないです。ありがとうございます。

司会者：どうもありがとうございます。そろそろ時間になりましたので、このご報告に対してはよろしいでしょうか。ご紹介が遅くなりましたが、いま通訳の労をとってくださっていますのは、高知の草の家、それから高知大学で教えてらっしゃる山根和代さんです。

山根さんは国際平和研究学会の理事を務めていらっしゃいます。

4．韓国の報告についての討論

内海：ネットワーク博物館について伺いたいと思います。韓国はこの間ニュースの発行や市民の声という新聞を自分たちで発行するとか、既成のメディア、既成運動が駄目な時にはNGOや市民団体が次つぎ新しい形の運動を作り上げてきています。それはこの間の韓国のパワーの中に非常によく象徴されていると思いますが、それでこのネットワークの博物館も韓国の運動として非常に斬新だし、そして将来ここがかなり重要なポイントになるかと思って伺いました。具体的に今どのような形で博物館をネットワークにするそれが進んでいるのか、そして博物館の箱物を建てる運動と、ウェブサイトでネットワークを立ち上げる、この２つがやろうとしていることだと思いますので、この２つが今どのくらい進行しているのか。そこを少し説明していただければと思います。

リー・スヒョー：始めの発表の時、平和博物館の歴史の経緯を話しましたけど、もう一度繰り返して話しますと、平和博物館はもともとがベトナム戦争関係で、証拠究明運動を始めて、それから被害者の立場としてではなく加害者の立場としてどう反省するのか、そうした中でお互いの和解ができるのか　を中心にやっております。今作業が進んでいる途中ですけど、結果が出たものとしてベトナムに直接現場に訪問しながら、ベトナムで実際に被害にあった人たちと会いながら、その間の経緯のマニュアルみたいなものを今つくっています。平和博物館の関係のものはベトナム人だけではなく、全ての人たちの関係を含めて、私たちは加害者であり被害者であることを考えながら、今までの不安な過去を歩んできて、戦争をどう克服するのかと平和のために、私たちが市民の人たちと全ての人たちとともに、そのことをどうしていくのか、今考えております。最後に、ベトナムの戦争関係の過去と現代を記憶しながら、今韓国が進んでいる部分ですけど、イラクに派兵する改革が今起きています。その中でベトナムの人たちと韓国の人たちが一緒に相互関係の市民意識の教育の場所として平和博物館をつくることは大切ではないかと考えて、そういう作業を今進めています。韓国は2003年平和博物館の建設の推進運動をしてきました。今６か月ほどがたちましたけど、その中でなぜ平和博物館が必要なのかそのことを人たちにお知らせすること。それと全ての人たちと一緒に大きい運動をしながらお金を集めること。それと具体的なアイテムですけど、実際の生活の中で平和運動ができる場所として今平和博物館を準備しています。今進んでいる仕事の１つが始めの仕事で、今は先ほどの仕事を展開しています。

リー・デフン：１つ、移民労働者センターという形で平和博物館的な機能を果たしている、そういう試みがあります。２つ目。メキャンディというアメリカン軍の射撃場があり、ここは重要な漁場でした。最近このメキャンディの返還運動が活発で韓国政府を相手にした訴訟に勝ちましたので、この射撃場は返還されます。地元のコメッティグループがこの跡地に平和博物館をつくろうというアイディアを持っていて、そこに環境平和エリアをつくり、それを平和博物館の一形態としたいという考えをもっています。そういうことについて私たちの博物館は相談を受けたので、ノウハウやスキルを提供するという形で協力をしています。そういう２つの事例を挙げることができます。

司会者：内海先生よろしいですか。ほかに質問等。

朱：先ほど韓国の皆さんがいろいろ紹介してくださいましたけれど、私が興味を持っているのは、その生活の中の博物館が書いてありますが、一般に平和博物館といって、戦争と歴史とつながっています。だからそこは私にとって新しい見解で、その生活の中の博物館は私たち一般の市民と何か、人びとと何かつながりがあるのでしょうか。何か価値があるのでしょうか。それは私たちにとって新しい理念で、中国の南京今は、住宅地の所で平和活動をおこなっています。だから私の質問は、生活の中の平和博物館は、例えば暴力に反対するとか、展示する内容はどうなるのか、例えば芸術の形で表しているのでしょうか。

リー・デフン：平和博物館の発想の背後にあるのはこういうことだと思います。まず暴力です。いかに暴力を克服するかということが課題になるわけですが、韓国の場合戦争、朝鮮戦争あるいは軍事独裁政権の下での軍による暴力の経験があります。それから軍による暴力、戦争がなければ平和か、暴力がないかというとそういう訳ではなくて、軍の暴力は政治的な暴力につながっていきます。それは国家による暴力につながってくる、そしてそれはさらに社会の中に広める、とい

うか、蔓延させる背景になってくる。したがって社会的な暴力があります。それはジェンダーの暴力、性暴力もありますし、あるいは社会階層的な暴力もあります。したがって暴力を克服するには戦争をしないというだけではなくて、このようなさまざまな所にある暴力を全てトータルに捉えて、それらの暴力を克服することを考えなければいけないだろう、ということになります。韓国では市民社会、市民運動がある程度強いものがありまして、こういう背景があって、その生活兼博物館という発想が出てきた、こういう背景のもとに生活兼平和博物館が立脚している、といえると思うのです。そういう意味では国家の行為に対して期待しない面があります。あるいは市民活動が自立してやっていく面があると思うのです。それから芸術とか文学作品のことが出ましたが、確かに芸術や文学作品の重要性は認めます。同時に普通の人びとの芸術作品とか芸術活動もまた重要ではないだろうかと思います。

司会者：よろしいですか。他にございませんか。

キム・ギョンハル：高知から来ましたキム・ギョンハルと申します。

韓国の平和博物館の皆さんが今日、平和博物館会議に中国から参加された方と一緒に、初めてこの会議に参加されたことを、東アジアの平和博物館ネットワークに対してものすごく大きな意味があると思います。先ほど午前中の日本の問題ですが、最近の社会雰囲気でやる公立博物館への右翼の嫌がらせ、とかいろんな攻撃に対して展示の内容が取り消される、逆戻りというのですか、その部分の加害の問題を展示ができなくなる状況にあるということは、非常に深刻な問題であると思っております。韓国でもやっぱりこういう平和博物館をつくる当時サンケイ新聞という新聞社が報道した時、ベトナムのチャンチェンで、兵士として参加した軍人たちがその新聞社に乱入しました。

被害者であるのに、あれはどうして加害者ですかと、その暴力的な事件まであったのですけど、そういうやはり韓国の平和博物館としてベトナム戦争でのいわゆる加害の問題をどういうふうに展示をするか。その問題をわれわれは、どういう立場ではっきり展示、説明するかによって、それがいわゆる日本と東アジアの全体を国家の枠組みを超えた市民の連帯でものすごく重要なポイントになるのではないかなと思いますので、これに対してそれをどう展示する積もりでしょうか。

リー・スヒョー：先の一番上の質問ですけど、韓国の軍人の人たちが平和博物館に攻撃した時の答えは、私は最後に平和博物館の団体に参加していますので、もともと最初からベトナム戦争関係の運動、ずっと体をぶつけながら、闘ってきた経験者としてハン・ホンギョ先生から具体的な説明を聞いたらいいのではないでしょうか。

ハン・ホンギョ：自分は体をぶつけながら闘ったというのは誤りで、自分はそのまま拘束されたのです。家族は普通の軍人の一家ですが、その関係の集まりで、軍人の服を着てそのまま入れるとか、その姿を見せるのが普通です。日本の場合、参戦した軍人の人たちが自分の軍人の服を着て街に出ないと思います。日本ではやはり戦争に敗れて、戦争は繰り返してならないことが重要になったと思います。韓国の場合は参戦した軍人の人たちは自分の力が今の韓国の発展や、国をつくったとか、韓国をもっとも強くした人物たちであるという立場を持っています。今日平和博物館を私は見学しましたけど、平和博物館の入口に最初に兵役された人たちの物語が展示されています。そういう関係ですけど、今も韓国の場合は、やはり日本に植民地支配された影響がまだまだ残っていて、その関係で今の韓国の軍人の人たちの姿が特に一般的に見えるのです。今の韓国の場合は軍人の問題がすごく敏感な問題として帯びています。１つの例ですけど、人の関係の問題としては、良心的兵役拒否に対する軍人の人たちの攻撃がひどいです。それとの関係ですけど韓国の男の人が軍人の仕事をしたら、それが加算されるというシステムがあります。韓国の人たちがそれは差別関係だといって廃止の運動をしたことがあります。その関係で特にその賛成、軍人をした人たちが加算兵士は止めといわれながら、その関係も今攻撃しておるのです。私たちがベトナム戦争の親善運動を始めながら、ベトナム戦争の時に直接参加した軍人たちと懇談会を開催したことがあります。参戦軍人たちがそういう攻撃関係で、ベトナムの親善運動をする人たちが「あなたたちが反対している、そういう文化あれば一緒に行動的に話しながらそういう部分を解決しましょう。」と提案したことがあります。その時の会合をした時、退役軍人たちはみんなが軍人の服を着て、それとなぜ私たちが排されたのか、その理由を質しました。その中でまた話がだんだん盛り上がって韓国軍人たちがすごく暴力的な言葉を使いながら、このベトナム親善運動の人たちに暴力的な攻撃をしたことがあります。私がこれ

に参加して、戦争というものは破壊するものだとしっかり感じました。それと戦争の場所にいた人たちも、戦争に参加した後と前とで距離がすごく遠くなってしまったと感じました。ベトナム参戦軍人たちは、自分の生活も自分の人生もつぶれたと思います。ベトナム戦争後、韓国政府は加害をあまり認めてこなかったし、それとベトナム参戦軍人たちが背負った傷とか、被害の部分の関係も韓国政府はあまり認めてこなかったのです。今ベトナムが統一したことが、ベトナム戦争に参加した韓国軍人たちの影響だとの意識をもっている参戦軍人たちがいます。そしてベトナム戦争参戦軍人たちは、自分の力は結局韓国経済を成長したその影響の存在として自分の意見を主張しています。そのような状況の中で今また韓国の政府が今のイラク戦争に対して軍人をすぐ派遣しています。私はもともと平和博物館をベトナムに建設する計画を持っておりました。その時ベトナム関係の人たちと話したことがあります。その時韓国から来た人たちが、ベトナムの人たちに、「私たちがあなたたちに傷を与えたことを謝ります。それとこっちが派兵したことも謝罪します。」と言ったら、意外にベトナムの人たちが「私たちに謝らなくてもいいのです。私たちではなく、あなたたちの国で本当にまたそういうことが起こらないように平和運動をもっとがんばって下さい。」と言われました。そのベトナムの人の話がすごく気に入って、今の韓国の現実的な問題を取りながら、戦争の苦しみを、戦争と平和の問題をもっと重点しながら平和博物館運動をする予定です。ありがとうございました。

司会者：ハン先生どうもありがとうございました。この辺でAPUの方に質問があるかどうか伺ってみたいのですがいかがでしょうか。質問ございませんか。そうですか。総合討論の方に移っていきたいと思います。

5．総合討論

APUの方：中国の首相を日本と韓国が引きあった時に中国はどちらを選ぶのかということを僕は考えました。もしそうであるならば、今回亀井氏が言ったこと、靖国神社に参拝に行く状況を考えてみると、それはこれからの日本経済にとても影響すると思いました。そうなればこれから先日本の政府の中国に対する考え方、見解、韓国に対する歴史認識に対する謝罪といった形は避けられなってくるのではないかと考えます。博物館の前にまず自分の国を強くしなければならない、経済的に発展させることが第一であると思うのですが、もし、僕が言ったことが、実現の可能性が考えられるのであれば、そちらは日本に対してどういう要求を突きつけるのでしょうか。ご意見をお願いいたします。

朱：さっきの私の話は、全部レイアック発展研究所の所長コウゼン・コウ教授からと、社会科学院アジア太平洋研究所チョウ研究員の話を引用したわけです。もちろん私は賛成して同感です。先ほどの質問は、多くの人が考える問題だと思います。１つの国の急激な発展は、他国にとって心配をかける可能性があると思いますが、例えば今、中国脅威論という言葉が出て来てました。だが今中国政府は平和の急激な発展という言葉を出しました。私もそれに非常に賛成し、そういう面の、平和な中国の急激な発展という言葉をいろいろ聞きました。まもなく中国の鄧小平の百年記念の年になりますが、私はその記念の会議の中で、文章を発表するつもりです。つまり鄧小平は中国を解放されて、平和の発展という言葉を一番出した方です。これからもし中国が強くなると、必ず他国に対して何も脅威とかそういう心配をかけないという考えです。まだもう１つの言い方があります。中国はいつまでも強くしない方がいいという言葉もあるのですが、それにはもちろん反対です。だから、私も先ほどたくさん申し上げましたが、平和学、平和というテーマを、多くの中国の人びとに伝えてもっと広めようということです。以上です。

司会者：APUの方は質問等よろしいでしょうか。以上です。ありがとうございました。それではこちらに戻りまして、先ほど山辺さんから質問がありましたので。

山辺：先ほど韓国の討論で質問したかったのですが時間が切れたので、今質問させていただきます。非常に重要な戦争の課題を取り上げているということで興味をもって聞いたのですが、その中で特に私の興味を引いたことは、加害に参加した兵士が受けた被害の問題についてどう考えたらいいかということです。先ほどの討論の発言の中で政府はそのことの発表を押さえていると言ったわけですが、そのことを調査して、展示をしていくことを考えているのかということについてお聞きしたかったわけです。これはほんの１つの例なのですが、わたくしどもの博物館でもベトナム戦争を取り上げた中村梧郎さんの写真展をやったのです。その中で枯葉剤の後遺症のことを扱った写真も展示した

のですが、その中でベトナムの方だけではなくて、参戦したアメリカ人兵士や韓国兵士やその子供たちにあわわれている影響を捉えた写真もあったわけです。その辺のことが念頭にあったものですから、そういう参戦した兵士が受けた被害の問題について調査されないつもりなのか、そのことについてお聞きしたいと思います。

ハン・ホンギョ：韓国からベトナム戦争に参戦した軍人の数は32万人に至ります。その中でベトナム参戦軍人会の人によると、そのうち６万人の人が枯葉剤の後遺症による被害を受けています。政府の公式調査によると２万名の参戦軍人が被害を受けている、という数字が出されております。でもその調査はわれわれ平和博物館の能力を超えることであって、われわれは博物館としての調査をあまり意識しておりません。でも枯葉剤の被害の実態という部分は、平和博物館の展示の中には入ると思います。でもわれわれは何よりもベトナム戦争に対して、韓国の平和博物館で展示の焦点を与えることは、ベトナム戦争にどうして韓国の兵隊が行って参戦して、そしてそれは総合的にどういう結果をもたらしたということです。それと、韓国の博物館が伝えたい一番大事な、重要なメッセージは、韓国の兵隊がベトナム戦争に参加して民間人、ベトナムの民衆を虐殺したことを展示することではないかと思っております。われわれがそういうベトナム民間人の虐殺についての展示を始めたところ、朝鮮戦争の頃のアメリカの軍隊によって韓国の民間人が虐殺された事件が明らかになりました。ノグンニという所で、避難している普通の韓国の民間人がアメリカ軍によって殺された事件なのです。そういう問題を考えると朝鮮戦争の時にアメリカ軍によって殺された民間人のことを明らかにすることと同じ立場にたって、韓国によって虐殺されたベトナムの民間人のことを一番大事に展示しなくてはならないと思っております。だからその韓国軍人の被害という部分は、もちろん平和博物館の文化に一応関係はあると思ってるのですけど、何よりもそういう加害の問題は一番重要であるという立場を示していきたいと思っております。

司会者：山辺さん。よろしいですか。

山辺：加害を中心にしていることがよくわかりました。お話の中に朝鮮戦争の中でのアメリカ軍の韓国での虐殺事件のことが出たのですが、うちでも朝鮮戦争の展示をしたいと思っていますので、是非その辺の資料もいただきたいとお願いしたいと思います。（笑いが起こる）

司会者：今５人の方の手が上がっておりますが、それぞれ５人の方、手短にお願いします。

質問者：今日はどうもありがとうございます。２点だけ思ったことを質問をします。今回ネットワークの中で平和博物館があれば、そういう個々の事例を紹介していただきたいと思うのです。戦争はあかんと言うのであれば、記録と記憶の関係はどうなっているのか。博物館という空間の中で社会的記憶がどういうふうに記録されてきたのか。地域や文化の違いがあるので、一般的に概念化するのは難しいと思うのですけど、そうした人が物から感じることについての議論がもっと必要だというのが１点です。もう１点はこの立命館大学の平和博物館のリニューアルで思ったことですが、今回のシンポジウムの企画は、僕の研究対象なのですけども。博物館の意義を見つけることは、その地域社会の中で文化を創造していくこともちろんあると思うのですけども、今後今までの平和博物館の歴史認識を考える場合には、今までの学芸員だったり、その養成方法だったりでは、どうしても限界があるのではないかと思います。もちろん今までの歴史認識に限界あるというのではなくて、将来的にそういうネットワークの主体者を主体的に養成していくためのカリキュラムなどを主体的に考えたりする必要があるということです。

司会者：では今の質問は岡田副館長に、手短に。

岡田：５つの問題が混ざって伝わったようでございますけども、１つ私たちは、見学者に向かって、単に平和の、あるいは現在の地球はこうなってますという実状を伝えるだけでは不十分だという問いかけなのです。とりわけうちの場合は、大学生という、まさに若くこれからの未来を背負って立つ、そういう人たちを抱えているがゆえに、やっぱりそういう事実を知ってもらうだけではなくて、何かできることはありませんか、あるいは中学生、小学生の人たちに向かっても、やっぱり大きなことはできないかもしれないけども、環境のためだったらこんなことだってできますよ、ということだったら提供できると思うのです。そういった意味において、単に知るといっただけではなくて、

そこから一歩何か自分にできるものを探してもらえるような、そういう展示の方法を考えているのです。おっしゃっている意味はむしろ、大学教育の中におけるカリキュラム的な意味における平和学的な位置付け、あるいは学芸員課程、という感じで言われていますが、それはもう少し、大学全体として、大学のあるべきカリキュラムを考えていこうということになります。ミュージアムとしてできることは、今のところはそういったものを励ましていけるような内容を展開したいということです。

司会者：はい、どうもありがとうございました。次の方。

南：今日の討論を通して非常に印象深かったことを２つ言います。区別というか、明確化が必要と感じたわけです。戦後の日本で、平和を語る時に漠然と平和を語ると言いますか、過去の問題を曖昧にして平和を語るという、そういう風潮が強くあったと思うのです。例えば、その象徴的な例だと思うのですが、各地の戦争慰霊碑等の中に、昔は砲弾、鉄砲の弾が上にかたどられて、下に台座がある、こういう慰霊碑がたくさんありました。それを、戦後、私の知っている例でいくと例えば、愛知県一宮市の公園にある慰霊碑もそういうものであったのですが、戦後、その砲弾をとってしまって、砲弾の所だけ変えてしまって、鳩のマークを付けるという、そういう記念碑です。そういう類のものがたくさんあって、つまり平和の象徴なのだけど土台は変わってないという、そういうものがあるという、それが私には印象的です。つまり侵略戦争であるのか防衛戦争であるのか、加害であるのか被害であるのか、加害者であるのか被害者であるのか、という基本的な区別を曖昧にしたまま平和を語る。平和を一緒に語りましょう、平和のためにやりましょう、ということは掛け声としては言うけれども、その基礎の部分は曖昧にしている。そういう傾向があります。そのことが平和博物館の課題として、それを明確化していく課題、そういうのがあることを感じました。といいますのは１つは、ベトナムの平和博物館に関して軍人が参加しているセレモニーがあるということに付いての疑問が提示されて、私はそういった面白い提起だと思うのですが、しかし、ベトナムにとっては戦争は完全に防衛戦争であるので、戦うべき正しい戦争であったわけなのですが、そういう戦争の意義をベトナムの人が確認するという、そのことは当然のことです。つまり全ての戦争を否定して最終的にはなくしていくということを目標にしているとしても、みんな、現実に国民国家の中で軍隊をもって対峙しているその中で、やっぱり正しい、やむを得ない戦争と、否定すべき戦争の区別が明確にされないといけません。そして否定すべき戦争を批判していくような展示がまず求められます。なぜそういうなことを言うかといいますと、日本の場合、今は戦争に参加するような時代なっています。日本の参加する自衛隊の兵士たちは、過去の日本の戦争の歴史をどういうふうに認識しているのか、ということが問われると思うのです。実は自衛隊の中にある戦争記念館はほとんど加害の問題を無視しています。むしろ戦争を肯定的に描くという古い、伝統的な展示が今でも幅を利かせていて、国の予算で堂々とおこなわれています。そういう現実があるわけで、つまり戦争に参加する時代になってきた時に、曖昧な形で平和を語るということはもう通用しないということです。そういう、あの状況が生まれています。私たちは気づかれると思います。

もう１つ、１点だけ。今朝の討論の中でもう１つ最後まで詰めれなかった問題で、誤解があったらいけないので申し上げたいのだけど、中国の博物館に関連して、古い形の、つまり国と人民を区別して、人民は責任ないけど、国に責任はあるという教え方を中国がやってきたということはよく知られているわけですけど、そのことではなくて、つまり日本の人民といっても戦争の責任のある、つまり戦争の罪のある人民と、罪のない人民がやはりいるはずで、戦後世代には責任がないということははっきりさせないといけないと思います。その上で罪のないものに対して謝罪を要求するというのは無理な要求で、そういうことだと本当の交流がかなわないのです。その点で、有名なワイツゼッカーの演説の中に、罪と責任を区別するという議論があります。戦後世代には罪はないけど、責任はある、こういうふうにはっきり言っていて、そういう観点での交流のあり方というのは生産的なのではないでしょうか。戦後世代の責任の最大のものを、加害の歴史、中国に対する侵略の歴史、中国の関係でいえばはっきり認識する努力をする、それを伝える、それに基づいて行動するということだと思うのです。その辺のことを、このシンポジウムそのものもそうだと思うのです。つまり外国との交流ということを考えた時には、その加害の責任をはっきりさせることが前提であるということが今日はっきり分かったと思うのです。同時にそういう罪のある本当に謝罪すべき人間と、そうではな

くて罪はないけど、責任はあるという世代の行動の仕方も、区別が必要なのではないだろうか、というふうに思っております。すみません長くなりました。

司会者：貴重なコメントどうもありがとうございました。

牧：立命館大学国際関係学部のものです。僕の意見と大分重なった部分があったので、もう少し僕の意見を付け足して言いたいと思います。加害のことに関してですが、あるドイツ人が自分たちが近隣諸国に対しておこなった反省として、ドイツ人には４つの罪があると言って、法的な罪、これは加害をおこなった当事者とか指揮官とかがあたると思いますがそれが１つと、政治的な罪があります。これは国家の権力者も含めこれに属する国民が含まれると思います。３つ目に道義的な罪があります。これは人間が人間として自分たちがおこなったことに道義的な意識を持った人が当てはまります。これは国民とか権力者の区別なく、それを感じた人です。４つ目は、人によって違うと思うのですが、形而上の罪があって、これは宗教的な話なので、一応ここでは４つ目は省きたいと思うのです。これを前提にちょっと僕なりに整理してみたのです。ここでは罪という言葉を使ってるのですが、罪っていうと犯罪を犯せば刑罰が伴うように、罰が伴うという感があって、やっぱりそれは加害に加担した、加担したのではなくて加害を直接おこなった人たちは罪を受けるべきだけれども、そうではない人たち、つまり戦後世代の人たちは、罪はないと思います。この罰を伴うという意味での罪と区別して、過去を反省し問題を解決に導いていく任務としての責任というのを２つに分けて考えてみたのですが、この責任というのは責任が果たされない限り、時代が変わっても国家とか国民という概念が持ち続けるし、その体現者としての政治家や、具体的な国民がその責任を背負いつづけるべきだと思います。今日本の若者は寡黙だと思うのですけど、いろいろな人の意見を聞いてみると、１番の法的な罪・責任は強調されている気がして、この意味での責任とか罪が議論には上るのですけど、実際にはこの法的な罪・責任は戦後世代の人たちにはないと思うのです。では戦後世代の人たちにはどんな責任があるかと考えたら、政治的な責任と道義的な責任が少なくとも当てはまると思います。どのような意味での責任が自分たちにはあるのかを認識しながら平和を語れば、具体的な意味での活動ができると思って意見を言わせていただきました。

司会者：はいどうもありがとうございました。あとお２人ですね。

藤岡：コメントなのですけど、広島の意味について話をしたいのです。昔、19世紀は特にそうですけど正義の戦争はあったと思うのです。紛争を解決する手段で戦争というのは合理的な方法である。それは広島あるいはその後、宇宙の時代、宇宙衛星の時代、それから９月11日という時代に、新しい戦争観がやはり必要です。新しい戦争が生まれたという、そこの未来像を、広島が積極的に見たことを、どのように展示するかということです。すなわちこれからの未来において戦争、つまり現代の戦争においては勝者というものは誰もいない、全ては敗者になる。すなわち、あるいは戦争が人間を滅ぼすか、人間が戦争を滅ぼすか。かつては、その中間的な選択肢があったけど、その中間的な選択肢がなくなって、究極の戦争、２つのどちらかを選ばざるを得ないような、そういう時代になってきているのです。その認識をどう表現するかということです。それと裏腹の関係ですけど、市民社会が力を持ってくると、戦争なしで新しいより幸せな世界をつくりだせる。あくまで可能性ですけど。こういうことをどのように考えるかです。それを展示の中にどのようにインプットしていくのかという、そういう課題があります。私も果たしていけるかどうか分かりませんけど、思うのです。そのあたりの歴史認識です。平和博物館は、やっぱり歴史博物館だけではないので、非常に巨視的な19世紀から21世紀の中における戦争の意味の大きな変化を、どういうように展示するのかというようなことをやらないと駄目だと思うのですけど、そのあたりどうお考えでしょうか。

金丸：立命館大学経済学部の金丸と申します。今日は、日本、中国、ベトナム、韓国というここ何十年間に１回は戦争をしたり、あるいは植民地支配、支配関係にあったりした人たちが集まりました。平和の問題を考えるに非常に意義深いと思います。手短に１点だけ質問をしたいのです。それは、博物館という社会教育の場において、もう１つの、あるいは藤岡先生がおっしゃったように僕自身は歴史の問題は非常に大事だと思うのですが、歴史学において解明された新しい研究成果を、展示あるいは解説にそれぞれの博物館でどのように反映させる工夫をされているのか。その点につい

てお尋ねしたいと思います。

司会者：これはどなたへのご質問でしょうか。特にすぐの回答は時間がないので、課題として投げかけられたということで、受け止めます。最後に瀬戸先生で、これで本当に終わりで、最後の総括発言にいきます。

瀬戸：先にまわして欲しかったっていうのがちょっとあって、流れとはちょっと違うのですが。枯葉剤・ダイオキシンと書いてあるのですけど、これはたまたま間違えたのかなと思って黙っていたのだけども、先ほども枯葉剤の人体毒性の話が出てきたので、これはわけといた方がいいと思うのです。ベトナムでばら撒かれた枯葉剤はもしあれが純品であったら人間被害は出なかったのです。何があの問題を引き起こしたかというと、わずかながら残っていた、混ざっていたダイオキシンがあの問題を引き起こしたのです。どのくらい混ざっていたかというと、枯葉剤１tの中にわずか30gです。これが甚大な人体被害を起こしたのです。そこのところで枯葉剤イコールダイオキシンではないというところを認識しておかないとまずいのです。ダイオキシンの問題は終わっておりません。というのは今工業国で、とりわけ塩素を含んだプラスティックを燃やすとダイオキシンが出ております。おそらくベトナムでばら撒かれた量に匹敵するくらいのダイオキシンが日本の過去20年ぐらいの、ごみを燃やして埋めるというその過程の中で出ているはずです。それが土の中に埋まってるとか、環境に出てくるわけです。何が言いたいかというと、ベトナムでダイオキシン問題が終わっていないのです。今度は工業国で燃焼するという段階で匹敵するくらいのダイオキシンが出てるという問題をちょっと指摘しておきたいと思います。以上です。

司会者：どうもありがとうございました。今のはまさに構造的暴力の問題として、私たちが、平和を創るにあたっての課題の１つだと思います。それでは最後に安斎先生の方から総括発言をお願いします。

安斎：今日ここに居られる方がた、それから４つの国から参加したスピーカーの方がたに感謝するとともに、このシンポジウムを支えてくれた学生諸君、平和ミュージアムのスタッフに深い感謝を捧げたいと思います。どうもありがとうございました。これで終わりにしましょう。

【シンポジウムのまとめ】

安斎育郎

日本学術会議・平和問題研究連絡委員会と立命館大学が共同で開催したこのシンポジウムでは、アジアの４つの国の平和博物館関係者が報告した。

山辺昌彦氏（立命館大学）は、日本の平和博物館の展示の背景にある国民の歴史認識と日本政府の態度について分析し、日本での戦争展示の多様な試みを紹介、平和博物館に加えられている攻撃の影響を考察するとともに、展示のあり方と展示の実態について報告した。岡田英樹氏（同）は、立命館大学国際平和ミュージアムのリニューアル・プロジェクトの特徴を、①過去と向き合う誠実性、②現代的課題への挑戦、③広義の平和概念の採用、④平和創造の主体形成、⑤感性的手法の活用、⑥地域からの平和発信の諸点について述べた。

朱成山氏（侵華日本軍南京大虐殺遇難同胞記念館、中国）は、南京虐殺事件に関する日中両国の平和博物館の展示実態を比較し、両国の青年層の南京虐殺事件についての歴史認識の違いの実態とその原因を考察、克服する方向について提起するとともに、南京の博物館がその面で取り組んできた努力について紹介した。

グェン・カ・ラン氏（戦争証跡博物館、ベトナム）は、同博物館の目的や展示実態を紹介し、①持続的な遺物の収集、②広島のメッセージや石川文洋氏や中村梧郎氏の写真等、影響力のあるコレクションの整備、③戦争の証言者などの協力者の開拓、④移動展示への取り組み、⑤若者対象の活動の展開等について述べた。

リー・デフン氏とリー・スヒョー氏（平和博物館センター、韓国）は、韓国の平和博物館運動の理念（戦争の記憶の記録、平和意識形成との連結、生命と人権の価値の提起、連帯と参加精神の涵養、「生活圏平和空間」のネットワーク形成）について提起し、キム・スンチョル氏（広島市立大学広島平和研究所）がコメントした。

アジアで初めての平和博物館の会議であったこのシンポジウムは、初回ゆえの不十分性をもちながらも、互いに認識を新たにし、発想を刺激する報告や意見交換がなされ、極めて有意義であった。